

刀匠似な僧侶たち

47

特集

仏教が私に
くれたもの

魚川祐司

CLIP

ミャンマー伝統の遊戯「チンロン」に興じる僧侶たち。束の間のリラックスも大切なひとときのだろう。人生の中の特別な時間として仏教があるのではなく、仏教の中に人生がある。彼らの等身大の姿が、そう物語っていた。

 @freemonk_official

フリースタイルな僧侶たち Vol.47

特集 仏教が私にくれたもの

2017年8月1日発行

編集発行人 若林唯人

発行所 フリースタイルな僧侶たち
〒600-8305
京都府京都市下京区東若松町795-2-C
☎050-5583-4330

STAFF

編集長
若林唯人

編集
光澤裕顕
飯村絵理子

編集協力
久松彰彦

デザイン
梅本龍青 (NILOTPALA)

企画協力
竹林真悟、加賀俊裕
飯野顕志、福山智昭
財津宏経

問い合わせ先

記事内容・広告・弊誌設置のお問い合わせ

フリースタイルな僧侶たち編集部
☎050-5583-4330
info@freemonk.net

© 本誌の無断複製・転載・引用を禁じます。



魚川祐司

仏教が私にくれたもの

「おかしい」私の自分語り

はじめまして。著述・翻訳家の魚川祐司と申します。今回は『フリースタイルな僧侶たち』編集長の若林唯人さんより、「あなたの人生と仏教について書いてほしい(ざっくり)」というご依頼をいただいて、このように執筆を始めているわけですが、正直なところパソコンの画面の前で頭を抱えています。というのも、私は昔から、この「自分語り」というやつが、大の苦手だからです。

もちろん、私は細々とはありますが文章を書くことで収入を得ていますし、またときには聴衆の前に出て一人でお話をすることもあります。ですから、TPOに即した定型的な自己紹介や、何か自分自身以外のテーマに関するまとまった話であれば、たぶんそれなりに上手くやれると思います。私が苦手なのは、そのような一定の形式が明示されていない、一見「自由な」自分語りです。

たとえば、スピリチュアル系のワークショップなどに顔を出しますと、しばしば「シェアリング」という時間が持たれることがあります。「皆さんがこ

こで感じたことを、借り物の言葉ではなく、ありのまま思った通りに、自由に語り合って(＝分かち合って、シェアして)みてください」というやつですが、こういう場で求められる自分語り、私の最も苦手とするところです。

なぜ苦手なのか。実のところ、本当に「ありのまま思った通りに、自由に」語ってよいのであれば、問題ないのです。私の頭の中には、いつも断片的(で、しばしば無意味)な言葉と感情の流れが渦巻いています。たとえば、「アジフライソース」「ポッペケスタラカベックケッコ」「フリスタには書けない性的な妄想)」みたいな感じですが。

では、その場で実際に心に浮かんだからといって、それを本当にありのまま、「ポッペケスタラカベックケッコ」だの、「フリスタには書けない性的な妄想)」だのを、自由に目の前の人々に語ってもよいか。もちろんいけませんよね。人々はよくてドン引き、悪ければ、私をその場から追い出すでしょう。つまり、「ありのまま思った通りに、自由に」語ってよいとは言われるが、実際にはその「ありのまま」にも「自由」にも、暗黙の範囲と制限が、確実に存在しているということです。

魚川祐司(うかわ・ゆうじ)

1979年千葉県生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程満期退学。2009年よりミャンマーに渡航し、テーラワータ仏教の教理と実践を修する。現在はタイ・バンコクを拠点に著述・翻訳家として活動中。



お察しの通り、この場合に「おかしい」のは、当然のことながら私の方です。「普通」の人であれば、ありのままに思ったことを自由に語れば、その内容が当たり前に暗黙の範囲と制限の内に収まるのだからと思います。つまり、自然な振る舞いがそのままでルールの範囲内に収まるから、自分がルールを守っていることすら意識する必要がないわけですね。ですから、そうした「普通」の方々にとって、シェアリングが「ありのまま思った通りに、自由に」語るものであるのは当然のことです。「おかしい」のはそういうふうに捉えられない私の方です。

のっけから、なんだかややこしい話をしてしまつて恐縮ですが、申し上げたかったのは、私にとって、多くの方にとって「自然」であり「当たり前」である（と思われる）ことが、あまりそのような感じられていないということです。そして、この症状は私の子供時代には、もっと（本当に生きているのが嫌になるほどに）程度のひどいものでした。以下では、そのように「おかしい」生まれつきをしてみまされた私が、仏教から何をいただいたのかということについて、少しお話をさせていたいただきたいと思えます。

仏教は、自身が抱え続けてきた 根源的な苦しみを、 文字通り拭い取ってくれた。

リアル人生のチュートリアル

こうしていま振り返ってみても、子供時代、生まれてきてからだいたい15歳くらいまでの、私の精神生活はひどいものでした。なにしろ、親や教師や級友たちが普通に自然にやっていることが、何一つ「普通」にも「自然」にも感じられない。すべてに違和感しかなかったから、家にも学校にも居場所がない。まさに、「どこもhomeではなかった」わけです。

もちろん、これも冒頭のシェアリングの話と同じことで、一般的に見れば「おかしい」のはどう考えても私の方ですから、とくに両親などには苦労をかけたと思います。とはいえ、子供の私の主観的には、まあそれなりに厳しい日々でした。周囲は私に「普通に自然に振る舞いなさい」と言うのですが、私にとっての「普通」や「自然」は周囲のそれとズレているわけですから、私としては、そこで明示的には語られない暗黙のルールを、ぶつかるたびに血を流しながら、一つひとつ学習していくしかないわけです。この「リアル人生のチュートリアル」に、だいたい15年くらいかかりました。

いまでも印象的に覚えている、たしか高校一年生の頃の経験があります。ある夜、床に就いた私は、自分が「明日が来るのが嫌ではない」ことにふと気がついて、驚きました。とくに明日が来るのが楽しみだとか、ワクワクするというのはない。ただ「嫌ではなかった」というプラスでもマイナスでもない感じなのですが、それまでの私は、この世にそ

当たり前のことが当たり前でなくなる感じ

アメリカで禅を長年指導された経験を持つ藤田一照師（曹洞宗国際センター所長）が、各所で語られている子供時代の印象的な経験があります。藤田師が10歳の時に、自転車に乗って夜道を走っていた。そこで星空を見上げたときに、「これは何だ!？」と頭を殴られるような衝撃を受けた。それが一種の原体験となり、いま禅僧をやっている自分に繋がっている、というお話です。

この「これは何だ!？」感というのを、先ほどの文章と繋げる形で私なりに言い換えますと、「当たり前前」のことが当たり前でなくなる感じ」です。私たちが普通の精神状態で社会において生活している時には、「夜道」も「自転車」も、そして「星空を見上げる私」も、改めて疑問に思うような必要は全くない、まさに「当たり前」に理解できる事態ですよ。私は10歳の時に夜道を自転車走っていて、星空を見上げました。なるほどそうですか。でも自転車で走りながら夜空を見上げるなんて危ないよ気をつけてね。まあそれくらいのもんです。

ういう心理状態が存在することを知らなかったんですね。いまから振り返って考えてみると、その時までの私は、常に胸の中に潰物石を抱えているような精神状態だったので、「つらくない気持ち」というものがなかったのです。この世に存在することを知らなかったわけですが、この世に存在するものであり、その「外部」は存在しませんでしたから、それが地獄だという認識がなかったわけですね。

大人になってからも、もちろん人生でつらいことは色々ありました。しかしそれがどんな経験であれ、あの子供時代よりつらいということはない。たし、これからもそんなことはないだろうと思えます。というのも、いま何かつらい経験をしたら、少なくとも現在の私は、「つらくない状態」というものがこの世には存在し得る」ということだけは知っているわけです。「これ以外の状態があり得る」ということを認識しているというだけでも、あの頃よりはずいぶんましだと、心から思います。

そんなわけで、16歳以降の私の人生には、本質的な意味でつらいことは、主観的にはあまりありませんでした。後になって、仏教の本を書いたり話したりするようになった時に、一部の方からは、「彼は仏教に対して知的好奇心しか抱いてない」だとか、「彼からは苦が感じられない」だとか、そういう評を受けたら、場合によっては直接言われたりするものがあつたのですが、それはひょっとしたら、このあたりに原因があるのかもしれない。

とはいえ、私にとってはこれ以上ないほど生々しい苦しみが、他のわりと多くの方々にとっては

しかし、何かのきっかけでその「当たり前」な感じ、少し固く言い換えれば「自明性」が、剥がれ落ちる瞬間というのが起こり得ます。いやいやちょっと待って。「夜道で」「僕が」「自転車で」「走って」「星空を」「見上げて」いる。これは全然「当たり前」じゃないよ。なんで僕はこれを「当たり前」だと思っているのか。「これは何だ!？」。存在する世界の仕組みに驚愕するのではなくて、世界が存在していることそれ自体に驚愕する。そういう経験を、程度の差はあれ子供時代に（もしくは、大人になってからでも）された方は、少なくともいいのではないかと思います。

あるいは、この「当たり前」のことが当たり前でなくなる感じ」を、哲学者ハイデガーの用語で、*Unheimlichkeit* と言い換えることも可能かもしれませんが、全くない。heim は英語の home に相当し、それに否定辞の *Un-* がついて抽象名詞化されている単語ですから、これは要するに「家にいる時のようにくつろいでいられない感じ」のことです。一般には「不気味さ」と訳されることが多いですが、もっと平たく訳し換えれば、「違和感」と言ってもよい。いまの藤田師のエピソードに即して言えば、「自転車で走っていて星空を見上げる」ことが、いつものように「当たり前」に感じられなくなつて、その全体状況が、ある種の不気味さを伴つて、「これは何だ!？」という違和感とともに迫ってくる。それが *Unheimlichkeit* です。そして私の子供時代は、その日常のすべてが、この *Unheimlichkeit* とともにありました。

「知的・抽象的」なものにしか感じられないのだろうということは、これまでの経験から理解しています。そういう方々にとっては、ここまで私が書いてきたことも、「自分だけが特別だと思ひ込む、幼児的なナルシズムの表出」にしか見えないでしょう。それはそれで、仕方のないことだと思っています。あるいはひょっとしたら、そのお考えの方が正しいのかもしれないですね。

仏教が私にくれたもの

さて、そんなわけで15年間の長い「チュートリアル」を終えた私は、大学に入り、哲学科に進学し、そしてさらに大学院でインド哲学仏教を専攻しました。いま考えると、こういう道筋を辿ってきたのは、結局のところ、本稿ですつと書いてきた自分の「違和感（*Unheimlichkeit*）」を、何とかしたかったのだらうと思います。周囲の人々の「普通」や「自然」を必死に学習し、そこにある暗黙のルールを表面上はトレースできるようにしたとしても、私がそれを本当に心から「当たり前」だと思えるようになったわけではありません。形の上ではそれほど振る舞いながらも、私の心の中には、ずっと「これは何だ!？」と叫び続けるものがあつた。それが私に、こういう道を進ませたのだらうと思います。ですから、「なぜ仏教をやることにしたのですか」と、よく訊かれることがあるのですが、究極的には、それに対する答えは、「この違和感が私を後



ろから押し、前から引つ張ったのでそうなったので「す」ということになりまし、それ以外には、何を言っても後付けの説明にしかならない気がします。ただ、他にも色々と思いや実践の体系がある中で、敢えて仏教を選んだのは、たまたま私にそういう縁があったということ、そしてもう一つは、仏教のテキストを読んだ時に、ある種の「なつかしさ」というか、自分の抱えている違和感を共有し、それを解いてくれるような感覚を、私が覚えたということが大きいと思います。

そんなわけで、私が仏教に関わった動機は、実際のところ知的なもので学問的なものでもありませんでしたから、その必然的な結果として、私は仏教のテキストが語り明かそうとする事態の根源を自ら知るために、大学院の博士課程を満期退学してミャンマーに渡航し、テラワダ仏教の実践に身を投じることになりました。そして、そこにおいて渡航前に自身が必ず解決したいと決めて旅立った問いに関しては、完全かつ決定的な解決を得て、現在に至っています。

この「解決」の内容に関しては、理論の面では『仏教思想のゼロポイント』（新潮社）に、そして実践の面では翻訳書のウ・ジョーティカ『自由への旅』（新潮社）に、語るべき必要なことは十分に語ってありますので、それ以上の贅言を弄するつもりはありません。ですから、ここでは本稿のテーマである「仏教が私にくれたもの」について、その結果だけを申し上げようと思います。

といっても、これは本当にシンプルなことですが、私、これまで述べてきた、物心ついて以来ずっと

抱えてきた「違和感」について、それを忘れたふりをして抑圧するのでもなく、あるいはそれに飲み込まれてのたうち回るのでもなく、ただそれを、認めて鎮くことができるようになりました。そういう意味で、私にとって仏教は、自身が抱え続けてきた根源的な苦しみを、文字通り拭い取ってくれたものです。

そういうわけで、私としては、自分が個人的に仏教によってどうしても解決したいと切望していた問題に関しては、すでに最終的な解決を得ており、またその経過に関わって公益性があると思われる部分についても、すでにまとまった形で公開を終えておりますので、これ以上に仏教について公の立場で語ることは、徐々に控えていくつもりでありました。もちろん、仏教は私のものの見方の根源にすでに深く食い込んでいますから、今後も全く言及しないという事はないでしょうが、それをメインテーマとした作品を世に問うことからは、（すでに受けてしまった仕事もありますので、いきなりすべてというわけにはいきませんが）少しずつ手を引いていくということですね。

しかし、最近はずっとそう公言している私に対して、『フリースタイルな僧侶たち』編集長の若林唯人さんは、「それでも敢えて語ってほしい」と熱心に勧奨され、その心意気にほだされて、私もこれまで「言っても仕方ないことだ」と語らずにきたこんな恥ずかしい「自分語り」を公にしてみる気になりました。

若林さんおよび、これまでお読みくださった読者の方々に、深く感謝を申し上げます。

BOOK info.



『仏教思想のゼロポイント』

魚川祐司：著
¥1,728 / 新潮社

日本仏教はなぜ「悟れない」のか？
仏教の始点にして最大の難問である「悟り」の謎を解明し、日本人の仏教観を書き換える決定的論考。



『自由への旅』

ウ・ジョーティカ：著
魚川祐司：訳
¥3,456 / 新潮社

テラワダ仏教の伝統的瞑想法
ウィパッサナーの究極マニュアル。
「呼吸法」のほか「意識変容への対処」「悟りの最終段階」を解説。

写真上／程よいアップダウンの丘を越えていきます。棚田や茶畑などのプランテーションが美しい。
写真下／ゴール地点で記念の一枚。このトレッキングで覚えた熟語は、「Make a face!」=「変顔で！」



夢は何ですか？

特集記事の取材も兼ねての10日間のミャンマー旅行（自費です）。滞在中、どこに訪れようかと旅ブログを漁っていると、複数のブログで「一番よかった！」と書かれていたのが、「カローからインレー湖までのトレッキング」だった。高地をおよそ60キロ、二泊三日かけて歩く。食事は、ツアー会社の人が先回りして作ってくれるミャンマー料理。宿泊は、田舎の村の民家。三食の食事・宿泊・ガイド付きで、なんと五千円ほど。ここに行くことに決めた。

カローという小さな町に到着し、ツアー会社で申し込む。一緒に歩くメンバーは、その時のご縁。メキシコ人男性のルイス、コロンビア人女性のメリッサ、僕の三人だった。翌朝、ミャンマー人女性ガイドのイーに連れられて、四人で出発した。お互いに色々質問をしながら、自己紹介しながら歩みを進めていく。二泊三日も、初対面の人とずっと一緒にいて、徐々に心を開き合う。そんな経験は初めてだった。大学時代の専攻・仕事・趣味・恋愛・音楽・政治・宗教……。話題は色んなジャンルに及び、改めて尋ね

られてハツとしたり、価値観の違いに考えさせられることがたくさんあった。ルイスとメリッサは、8年間付き合っているカップルで、30歳前後。まだ結婚はしていない。二人で1年間、海外放浪をしている途中で、ちょうど半分を過ぎたところらしい。僕が日本を発つ前、「10日間も？ いいなあ」という声をたくさん聞いたけど、1年間って、ね。いいですねー。特に心に残っているのは、二日目の朝の休憩中。イーが三人に「夢は何ですか？」と質問してきた時のこと。ルイスはすぐさま、「海が見える場所に、家を建てることだよ。小さな庭もあってさ」。僕とイーは、「いいねー」と相槌を打つ。僕の番が回ってきたけど、咄嗟に答えられなかった。今この記事を読まれている方は、もしこの質問をされたら、何と答えますか？

結局、僕は自分の答えをごまかしながら、メリッサに「夢は、結婚？（笑）」と尋ねてみた。すると二人は、少しうつむきながら、「ノー」と首を振る。その時の微妙な空気感が、どこか心に引っかかった。

結婚はサイン
夕飯を食べている時、なんとなく会話に間があく瞬間があった。ふと、口をついて出てしまった。「でも二人は、なんで結婚しないの？」
それに対する二人の答えが、なんかね。よかつたんですよ。「結婚っていう考え方が、好きじゃないんだよ。別に『結婚』をしなきゃいけないわけじゃないよね。今のこの旅は、ある意味でハネムーンみたいなものなんだ。この旅を終えて、メキシコかコロンビアと一緒に帰ったら、制度的に優遇されるし、結婚するかもしれない。でも、それは、紙にサイン。するだけのことさ」
おお。うん、たしかに。日本にいて、それに僕はお寺の長男だし、「結婚を、しなければ」というプレッシャーを感じていた。そんな重たい固定観念、あるいは共同幻想が、フワッと宙に浮くような心地よさがあったのだ。
「こうならなければ」。その思い込みが苦しみを生むし、そこから解放されることで楽になる。何気ないやり取りだったけど、どこか仏教に通じると感じた瞬間だった。

ミャンマーで、トレッキングしてきた

文／若林唯人



竹林真悟

1972年北海道生まれ。浄土真宗本願寺派僧侶。満誓寺副住職。お檀家参りしつつ、西本願寺の境内ガイド「お西さんを知ろう」に従事。百ヶ寺以上参拝したと自称する。趣味はガンダム。

お寺でよくみかけるけれど、なんだろ“アレ” Vol.1

文／竹林真悟

東寺の五重塔と仏塔

京都を訪れると、これでもかと、京都らしさをビジュアルで満足させてくれるものが京都駅近くにそびえ立っている。ゆるキャラ「たわわちゃん」のいる京都タワーのことではない。東寺（京都市南区）の五重塔である。
東寺の五重塔は、寛永二十一年（一六四四）年に建てられた五代目。高さは約55メートル、木造の建築物としては日本一の高さだそうで、弘法大師空海が唐より持ち帰った仏舎利が納められている。仏舎利？ そう。そもそもお寺にある塔は、釈尊の御遺骨（仏舎利）を収めるお墓のこととて、サンスクリット語のストウーパ（漢字で卒塔婆）には、「ものが堆積して高くなっているもの」「丸く土を盛り上げた墳墓」という意味があるらしい。卒塔婆と漢訳された真ん中の文字「塔」は頻繁に使われるようになった。仏塔ともいう。
ほんじゃ、誰が釈尊のお墓をつくったんだらうか。やっぱりお弟子さんたち？ いや違う。釈尊のお墓は、信者さんたちがつくったと伝わる。お坊さんは、学校やお寺で



饅頭形をしたサーンチーのストウーパ。四方には釈尊の物語が多数彫刻された「トラナ」（塔門／鳥居の起源とも）が設置されている。そのレリーフは見事の一言だ。（イラスト：竹林真悟）

次のようなことを学ぶ。ご自身の死期を知った釈尊は、出家の弟子たちに、「出家者は自分の解脱を優先して、私の葬儀・納骨にはかかわるな。葬儀・納骨は在家の者で行うように」と遺言した。ちなみに、宗派によって違うのだからけれど、当初、出家者は葬儀に携わることができなかった。いつしか、亡くなった人に戒名・法名が授けられ、僧侶（出家者）の葬儀として、出家者が葬儀に携わるようになった……とか教えてもらった。

者さんらの手によって茶毘に付され、その御遺骨は在家信者の部族八つに分けられた。御遺骨を持ち帰った部族は、それぞれに釈尊のお墓（ストウーパ）を建てた。そして釈尊滅後三百年ほどしてから、インドを統一したマウリヤ朝にアシヨカという王様（漢字で阿育王）が現れて、八つに分けられた釈尊の御遺骨すべてを回収して、改めてインド各地に再分配した。その際につくられたのが、サーンチーにある仏塔だそうだ。現存する世界最古の塔といわれるサーンチーの仏塔。そ

の見た目は、日本の塔とは似ても似つかない。けれど、ちゃんと共通点がある。その共通点こそ、塔がストウーパである証だともいえる。
① 仏舎利・寶石・経文など、仏舎利的な物が納められる
② インドでは高貴な人は日傘をさしたことから、日傘を模した形状の物が残る
③ こんもりとした半球状の盛り土で、饅頭のような形状をしている
が、それ。……って、塔のどこに日傘や半球状の饅頭があるんねんっ。
塔をよーく見てほしい。お分かりいただけただらうか。何重にもなった屋根が傘のようである。そして、屋根の上にあるアンテナのような輪塔のつけ根。そこに、こんもりとした円い半球状の饅頭が乗っている。
塔に興味を湧いたアナタ。ぜひ京都の東寺の五重塔を見に行かれるといい。いやいや、幸い日本には多くの仏塔が建立されている。サーンチーの仏舎利塔のように、釈尊のレリーフが嵌められているところもあるの、仏舎利塔でも塔の魅力は堪能できる。今すぐお近くの塔にレッツゴー。

久松彰彦
1990年東京生まれ。曹洞宗の大本山永平寺で修行し、現在は曹洞宗総合研究センターに勤務している。最近、柔軟体操に凝っていますが、開脚の限界を感じつつある今日この頃です。

寺社フェス「向源」 京都で初開催！

文／久松彰彦

「向源」という寺社フェスを
ご存知だろうか。文字通り、
源に向かう、というコンセ
プトで、今に伝わる多様な文
化の根底にある本質に触れて
自分を見つめ直すことを目的
としたイベントだ（2011
年から毎年開催）。7年目を
迎えた今年の向源は、初めて
年2回の開催。1回目は5月
に東京で開催されたが、10月
には京都で開催される。

京都といえば、仏教寺院の
本場。有名な寺院はいくつも
あるが、そんな京都を見下ろ
す比叡山には、鎌倉時代に伝
教大師最澄によって開かれた
比叡山延暦寺がある。その延
暦寺とゆかりの深い大原で、
10月の向源は開催されるのだ。
主催者の天納玄雄さんは、
三千院（京都大原）の側にあ
る勝林院と実光院のご住職。
趣味は、読書と写真とヤフオ

天納玄雄さん(左)と向源代表の友光雅臣さん(右)。会場となる勝林院にて。



ク。読書は、小説から学術書
まで。お寺の写真を撮っては
SNSにアップ。ヤフオクで
は、古文書を探しているとい
う。プライベートまで丸ごと
お坊さんな天納さんは、どん
な向源を見せてくれるのか。
現在、京都向源の開催に向
けて企画を進めているとのこ
と。「三千院のご住職による
坐禅指導」「抹茶に使う茶杓
作り体験」「お坊さんと話そ
うのコーナー」など、様々な
コンテンツを盛り合わせる。

メインは、東京と同じく
「声明」。実は、京都で声明を
中心に据えることには、特別
な意味がある。大原は、日本
の声明の「源流地」ともいわ
れる聖地なのだ。その声明は
「魚山声明」と呼ばれ、現在
も宗派を超えて塾生の僧侶が
在籍し、声明を学んでいる。
太鼓を用いた勇ましい調子が
印象的だった東京での声明と
は異なり、魚山声明は「泣き
節」と呼ばれる、非常にゆっ
たりとした女性的な雰囲気
を感じさせるもの。「魚山塾」
の僧侶による京都の声明公演
ぜひご堪能いただきたい。
また、「お寺で醸造されて
いた日本酒」を復興させよう
という取り組みも紹介される。

かつて滋賀の百濟寺でつくら
れていた日本酒を、取り戻そ
うというものらしい。
トークイベントも目を引く。
「テクノ法要」と「Nan Jan
（南無ジャズ）」の対談、そし
て天納さんと「邦楽2.0」と
の対談・セッションが予定さ
れていて、いずれも伝統的な
音、を現代的にアレンジし
て表現しようとしている革新
的な取り組みだ。

「向源2017・京都」
日時：10/7(土)・8(日)
場所：勝林院・実光院・宝泉院・三千院
(京都市左京区大原勝林院町187番地)
詳しくは向源ウェブサイトまで。
<http://kohgen.org/>



応援してくださる
サポーターを募集しています

- サポーターには、本誌を毎月お送りいたします。(年間4回)
- 法人サポーターの方は、本誌にお名前を掲載いたします。
- フリースタイルな僧侶たち主催イベントにおいて優待します。

協賛年会費:5,000円(個人) 30,000円(法人)

会費振込先:
三井住友銀行 園田支店 (422) 普通 5092943
フリースタイルな僧侶たち 代表 若林唯人

お振り込みの際、あらかじめ下記のいずれかにご連絡ください。

☎050-5583-4330 E-mail:info@freemonk.net



心といのちの電話相談室

☎03-3436-6823

相談受付 毎週月曜日・金曜日 10:00～16:00 (祝日、盆、年末年始は休業いたします)

「心といのちの電話相談室」の特徴

- あなたを支えたいと願う人がいます。つらいお気持ちおはなしください。
- 研修を受けたお坊さん、お寺の奥さんがお話を伺います
- 多彩なご相談に対応します
- 周囲の方もご相談ください

「心といのちの電話相談室」の約束

- 秘密は必ず守ります
- 勧誘はしません
- 無料でお受けします

「心といのちの電話相談室」事務局
〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 公益財団法人 浄土宗ともいき財団 内
TEL.03-3436-3353 FAX.03-5472-4878 ホームページ <http://tomoiki.jp/>

詳しくは

編集後記

「僧侶じゃないのに、『フリースタイルな僧侶たち』に書いてもいいの？」と魚川さんから何度か尋ねられた。だけど私としては、それは問題にならなかった。

『仏教思想のゼロポイント』を初めて拝読した時の衝撃を、今でも覚えている。現代人の感覚からすれば理解に苦しみがち、あるいは得手勝手に解釈しがちな仏教の基本教理を、ここまで理路整然と、そしてごまかすことなく著された書籍に出会えて、心が躍るほど嬉しかった。

それ以上に感慨深かったのは、仏教に対する魚川さんの基本姿勢。自身の価値観に依拠して理解しようとするのではなく、それは脇に置いて、お釈迦さまが説かれた教説を「言葉どおりに」理解しようとする「如是我聞」の姿勢だ(これは、決定的に重要なことなんですよ)。後者のような理解をしようとするれば、必然的に実践(修行)も伴うことになる。平たく言えば「やってみないとわからない」のが仏教だからだ。「言葉どおりに」学び、実践したその先に理解された教説を、現代を生きる一人として語り直されたのが、本書だと言えるだろう。

突き詰めて、行学(実践と学問)をとともに修された方であること。冒頭の問いに戻れば、これが寄稿をご依頼する必要十分な理由だった。

それにしても、東京大学で哲学を、そして大学院では博士課程まで進んで仏教を学ばれ、さらにミャンマーに渡って実践に身を投じる、そのエネルギーは凄まじい。

魚川さんをそこまで動かさしめたエネルギーの源泉は何なのか。端的には、ご自身の「実存的な問題」である

とは聞いていたが、それが具体的にどのようなものであり、仏教の学びと実践を経て、どのように捉えなおされたのか。もちろん、一個人の話とはいえ、普遍的な示唆に富むお話が聞けるのではないかと。このような思いから「このテーマでの寄稿を」と「梵天勸請」のごとく魚川さんに懇願したのであった。

(ちなみに、2009年のミャンマー渡航前に、その決断の理由について話された動画がウェブ上に残っています。『余は如何にして出家者となりし乎』というタイトルの動画です。本誌と合わせて、そちらもぜひ聴いていただけたら。涙が出るほどシビれました)

今回、ミャンマー在住の魚川さんの元を訪ねたのは、編集者としても個人的にも、実践されていた場の雰囲気だけでも、この肌で感じたいと思ったからだ。

ヤンゴン滞在中、魚川さんには大変お世話になった。瞑想センターにて瞑想を体験するご縁を整えていただいたり、日本人僧侶の方の元に連れて行ってくださったり、信者の方たちの集まりにご一緒させていただいたり、ガイドブックだけではとどき着けない、ミャンマー仏教のリアルな場に毎日のご案内くださった。そして何より、難しいテーマを引き受けてご執筆くださったことに、この場を借りて改めて、深く感謝申し上げたい。本当にありがとうございました。

フリースタイルな僧侶たち代表 若林唯人



ミャンマー最大の都市、ヤンゴンにある瞑想センター。欧米人や日本人の姿もありました。ちなみに、天井に吊られているのは蚊帳です。

協賛法人サポーターリスト 本誌発行にあたり、ご支援いただいた皆さまに厚く御礼を申し上げます

- | | | | |
|--|--|--|---|
| 浄土宗……安心院(八幡市)／安楽寺(南丹市)／延命寺(堺市堺区)／吉祥寺(萩市)／九品寺(京都市南区)／教安寺(福津市)／慶蔵院(伊勢市)／光照院(台東区)／金剛寺(京都市東山区)／西明寺(尼崎市)／西楽寺(京都市伏見区)／西林寺(大阪府泉南郡)／浄栄寺(東近江市)／正覚寺(青森市)／正善寺(伊丹市)／勝楽寺(町田市)／真光寺(今治市)／新善光寺(札幌市中央区)／崇福寺(甲賀市)／善願寺(甲賀市)／善道寺(札幌市豊平区)／臺鏡寺(枚方市)／福王法林寺(京都市左京区)／潮音寺(京都大島町)／長壽院(台東区)／梅窓院(港区)／法岸寺(静岡市清水区)／寶松院(港区)／法善寺(大阪市中央区)／妙慶院(広島市中区)／無量光寺(鳥取市)／龍岸寺(京都市下京区) | 浄土真宗本願寺派……光栄寺(井原市)／光照寺(大阪市東淀川区)／光徳寺(みやま市)／光明寺(奈良県吉野郡)／西教寺(生駒市)／西方寺(大和郡山市)／西法寺(北九州市)／浄元寺(尼崎市)／正源寺(大津市)／正宣寺(大阪市北区)／浄満寺(大阪市西成区)／信覚寺(福岡県朝倉郡)／崇興寺(福山市)／養法寺(金沢市) | 真言宗豊山派……寶積寺(松山市) | 単立……五百羅漢寺(目黒区)／瑞聖寺(港区)／法然院(京都市左京区) |
| 真言宗御室派……三津寺(大阪市中央区) | 真宗大谷派……覚法寺(福岡県八女郡)／称讚寺(新潟県長岡市)／正蓮寺(伊豆の国市)／超覚寺(広島市中区)／宝皇寺(函館市) | 臨濟宗妙心寺派……円光寺(台東区)／宜雲寺(江東区)／勝林寺(豊島区)／陽岳寺(江東区)／龍雲寺(世田谷区) | 企業・団体・店舗……一般社団法人日本石材産業協会(千代田区)／逸藤新兵衛商店(京都市下京区)／学校法人鎮西学園(熊本市中央区)／株式会社アールアンドダブリュー(京都市中京区)／株式会社アンカレッジ(港区)／株式会社カウントワン(京都市中京区)／株式会社美仏像(京都市北区)／株式会社葦寿堂(神戸市)／株式会社作鳥(京都市下京区)／株式会社Flucle(大阪市都島区)／京都坊主BAR(京都市中京区)／京念珠せにや(京都市下京区)／茶坊えにし(台東区)／寺院コム(京都市左京区)／翠光堂飯急淡路駅前店(大阪市東淀川区)／大正大学(豊島区)／豊田登山堂(京都市東山区)／浜屋株式会社(姫路市)／坊主BAR 緑(岐阜市) |
| 浄土宗西山禅林寺派……光明院・田中医院(京都市中京区)／宝泉寺(津島市) | 浄土真宗東本願寺派……縁泉寺(台東区) | 曹洞宗……四天王寺(津市)／瑞生寺(浜松市中区)／南詢寺(守口市)／鳳仙寺(宮城県亶理郡) | 時宗……正法寺(京都市東山区) |
| 浄土宗西山禅林寺派……光明院・田中医院(京都市中京区)／宝泉寺(津島市) | 高野山真言宗……弘法寺(和泉市)／菓師院(岸和田市) | 日蓮宗……池上實相寺(大田区)／法華寺(亀岡市)／妙海寺(勝浦市)／妙見寺(橋本市) | |

*敬称略・五十音順

弊誌『フリースタイルな僧侶たち』に掲載する広告を募集しています。

媒体情報：A4変型／16P／フルカラー／年4回発行
発行部数：14,000部(2017年8月現在)
設置箇所：寺院、大学、書店、店舗など

お問い合わせはこちら
E-mail:info@freemonk.net

築90年の京町屋で本格タイ料理

佛沙羅館

Tel:075-361-4535
<http://r.gnavi.co.jp/k024400/>

住所:京都府京都市下京区木屋町通松原上ル美濃屋町173-1

祇園ギャラリー源右衛門

Tel:075-533-6088
京都市東山区祇園町南側555番地(祇園ホテル1F)
お念珠取り揃えております




